



かぐらつとめ 付人

おつとめの役割は、教祖七十年祭迄は、祭儀掛で組んで、真柱のお許しを頂いたものであるが、その後は殆んど善衛様が自ら手を下してやつて下さることになつて、変更はそのお許しがないと出来ないことになつた。この外に時々しか廻つて来ない役割で、命の縮む思いがするのは、附人(つけひと)の役である。

附人というのは、かんろ台をとり囲んでつとめられるかぐらつとめの十人の人衆が、お面をつけはずしせられる手助けなどに附けられる控えの人の事である。大体かぐらつとめのつとめられる真座は、十間四方で、上段からその地表迄二間の深さになつていて、中央にひながたかんろ台が据えられ、その頭部が、南北礼拝殿から拝せられる程度の高さに立っている。これを図示すると次の通りになる。(註1次頁参照)

まず次図の通り、一同所定の位置について、玉砂利の上に正座し、かんろ台に向つて一礼すると、それぞれの附人は中腰になつて、次の通り手分けして、神面をつけるお手伝いその他をつとめる。

Iは、くにとこたちのみこと(これは必ず真柱様がつとめられる)につく。
 2は、つきよみのみこと(殆んど善衛様がつとめられるか、最古参の本部員がつとめる)につく。

- 3は、をふとのべのみこと、かしこねのみことにつく。
- 4は、をまたりのみこと（これは必ず真柱奥様がつとめられ、不浄の時とか、事故ある場合は、真柱様の令姉玉千代様がつとめられる）につく。
- 5は、くにさづちのみこと、くもよみのみことにつく。
- 6は、たいしよくてんのみことにつく。

その一つ一つについて説明すると、男三人の附人中の最古参者がIをつとめ、その次が2を、新参の者が3をつとめる。

Iの者は、真柱様が面をかぶられる時のお手伝い、それがすむと、その尻尾が両肩にかぶさぬよう、くるくると幾巻か巻いて、その端をたいしよくてんのみことの右手首につなぐ。普通の結び方ではほどけるので、必ず輪結びにして、引張ると右手首がしまるようになる。それから十人のつとめ人衆全部が準備を完了するのを見て、右手を高くあげて、上段の歌方に合図し、真柱様の真うしろか、東寄りうしろに正座して、おつとめ中尻尾の巻きがゆるんで両肩にずり落ちて、お手がふれなくならないよう、注意したり直したりする。

2の附人は、御神面が二つあるので、まず背にしやちの神面を背負うてもらい、その紐を結ぶ手伝いをする。それが終つて神面をつけられると、その紐を頭のうしろで結び、た

れをうしろにたらし揃えてから、西北隅寄りに正座して控える。

3の附人は、神面をつけられる手伝いをすると共に、をまたりのみことから延ばされてある長い方の尻尾布を、をふとのべのみこと役の右手首に結いつけ、短い方の尻尾布を、かしこねのみこと役の右手首に結えりと、西南寄りの後に正座して見守る。

4の女附人は、神面をつけることを手伝つた後、その尻尾布が三方につながるので、おつとめ中は、中腰になつたまゝ、尻尾布をさげていなければならぬ。この役はなかなかむづかしいので、大抵女附人三人中の最古参者がつとめる。

5の女附人は、まずくにさづちのみことの背に、亀の神面を背負わせ結ぶ手伝いをし、くもよみのみことと両神の神面かぶりを手伝う。その上くもよみのみことの左手首に、をまたりのみことからの尻尾布を結ばねばならない。そしてきみ両神（註—いさなぎ、いさなみ）の方にも気を配る。そして東南寄りに正座して控える。

6の女附人は、たいしよくてんのみことの右手首に、くにとこたちの尻尾布を結え、神面かぶりの手伝いをしてから、その背後に控える。

あしきをはらうてたすけたまへてんりおうのみことの、二十一遍のおつとめが十八回迄終つたとたんに、歌方の方で合図の木が入ると、間髪を入れず、たいしよくてんのみことの左たもの先をグイと引張つて合図する。たいしよくてんのみことは、あとの三回の手振りを切る手にかえられる訳である。

かようにして、工の附人の手をあげる合図で、歌方の木が入ると、一同かんろ台に向つて平伏し、一拜終つて立たれる。このときみ両神だけは、東列外に對いあつて立たれる。全附人はそれぞれの位置に正座して、おつとめ中にながれた尻尾布がほどけたり、その他支障のない様見守つていて、もしあれば直ちに立つて、支障を直すのである。

かくておつとめがすんで、一同元の席に着座、一拜が終ると、神面をぬぐ手伝いから、神面や尻尾布を元の定位置に置く事迄手伝う。終つてそれぞれ退下されたあとの玉砂利を手でならしてから、上段へあがるのである。

かぐらづとめが本教至高至嚴至聖のものであるから、これに關係する者には、些の怠慢懈怠が許されないのは当然であるが、この真座に入る者は、その日の朝必ず齋戒沐浴、下着まで新しく清潔なものにかえねばならないし、不浄期間にある女性は必ず遠慮することになつてゐる。夏の間はまだ良いが、嚴寒、かんろ台の上は雨うたしの風穴になつてゐるから、雪嵐が吹き込む時など、玉砂利の上に四十五分も正座する時、寒さに骨も身も氷る思いがするのである。

それに神面をかぶつておつとめがつとめられるのは、真柱様から許されたものに限るのであつて、本部員と雖も誰彼なしにつとめることは許されない。附人は本部員は誰でもつとめられるが、前者は十年二十年とつとめてゐる者の中から、真柱の指命を受けて始めてつとめ得るのである。そしてその間に自然にをびや、はえでなど、各種のおつとめにいた

る迄、その手振り、足の踏み方を会得するのであつて、真座以外でこれを教えてもらつたり、稽古したりすることは、慎まねばならない事とされている。そのほか月(北)日(南)両神は真柱様御夫妻に限られており、ぎ、み両神(東)も特別な夫妻がつとめられる事に定まつてゐるし、本部員を拜命しても、十人のつとめ人衆の中においそれと入れるものではないのである。かぐらづとめに於てさえ右の通りであるから、その他の事でも、同じ本部員といつても千差万別で、完全に何もかもつとまる人は慥いのである。

たとえば、多年別席取次を許されない人も、同じ本部員の中にあつたのであり、現在も亦あるのである。かの著名な増野道興先生なども生涯別席に出られない本部員の一人であつたことは、周知の事である。